

## 博士学位論文審査結果の概要

ふりがな	かとう あきこ
氏名	加藤 亜妃子
学位の種類	博士（看護学）
学位記番号	博第8号
学位授与年月日	平成24年3月17日
学位論文題目	終末期がん患者の家族が生きる他者との関係性の様相
審査委員	主査 石川県立看護大学 教授 吉田和枝 副査 石川県立看護大学 教授 浅見洋 副査 石川県立看護大学 教授 丸岡直子 副査 石川県立看護大学 教授 牧野智恵

### 審査結果の概要

審査および最終試験を平成24年2月6日に行った。以下に、本研究の概要と最終試験の結果を示す。

がんと診断された患者のみならず、患者の家族も多大なストレスを体験しているという背景を踏まえ、本論文は終末期にあるがん患者の身近にいる家族が、他者とのような関係性を持ち生きているのか、その様相を明らかにし考察したものである。本論文はすでに本人が発表している終末期がん患者を看病する配偶者のストレス—対処過程（加藤、水野著：日本がん看護学会誌第23巻3号 4-13, 2009）をさらに拡大発展させたものである。

研究方法として現象学的アプローチ法を用いて、終末期にあるがん患者の配偶者11名、娘2名、兄弟2名に聞き取り調査を行っている。インタビューへのコミットに関しては、その聞き取った内容について、調査者が対象者に口頭や図式でもって確認しながら進めており、実態把握の明確性を高めることに極力努めながらデータを収集しており、そのプロセスの記述がなされている。また、全調査過程を通してその調査手続きは倫理的に適切な方法で行われている。

調査の結果として、聞き取りデータについて意味的な分類作業を繰り返し綿密に行いながら、終末期がん患者の家族が生きる他者との様相において【自分から壁をつくり孤独を生きる】【自分が安寧を感じられる関係を求める】【とらわれから開放される関係性を生きる】という3つのテーマを導き出している。家族は他者から壁を作ることで安寧を得たり、また孤独にならざるを得ない状況であったりする様相が考察されている。また、家族は安寧を得られると感じる関係を求めていること、そして他者からの働きかけや言動によりそれまでとらわれていた苦悩的な考えや思いから解放される様相があること等々を明らかにしている。

がん患者の家族が他者とのような関係性に生きているのかという様相を明らかにしようとした試み自体が新しい視点であるといえよう。近年はがん看護において、その患者を取り巻く家族にも視点を向ける必要性は周知されるようになったが、ストレスフルな状態に置かれやすい家族がどのような他者との関係性を持ち生きているのかをより深く洞察し理解し、手助けをする糸口を見出すために、本論文は有用な示唆を与えるものである。本論文および研究の方向性は、看護、および看護学の発展に寄与するものと考えられる。以上の結果、本論文は博士（看護学）の学位授与することに値するものであり、論文審査ならびに最終試験に合格と判定する。